

九分割統合絵画法を使った青年期にある
日系国際児の文化的アイデンティティについての研究

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
久本真由美

国際結婚をした男女から生まれた子供が国際児であり、そのうち両親の一方が日本人、他方が外国人の子供が「日系国際児」である。国際児は、成長とともに母方からの文化と父方からの文化の両方と向き合い、複数文化を意識しながら文化的アイデンティティを育み、模索して行くと考えられ、結婚のような人生の中での岐路に立つごとにそれは極めて重要な選択要素となると推測される。そこで国際児の文化的アイデンティティの一時期を捉える事は、国際児自身を支援する時に重要であると考えられ、親の文化実践による文化的価値観を世代間連鎖をして受け取った子供たちはどのような文化的アイデンティティを育み、形成して生きているのかを九分割統合絵画法を使用して、シンガポールにて3名、日本にて3名の日系国際児を調査をした。尚、本研究では、文化的アイデンティティはアイデンティティの一側面であり、自身がある文化に所属しているという感覚である文化的帰属感や帰属意識とする。

日本人である親からの文化的アイデンティティの九分割を M-GTA 法にて分析をした結果、文化的アイデンティティは、以下の三要因で構成されている事が分かった。1「環境要因」:体験から来る具体的、現象的、可視的なもの。日本の国際児はその環境に生活しているので、「安全、平和、大災害」と日常体験してるものが具体的に描かれ、継承したいものも「平和、綺麗な公共」などシンガポールの倍挙げられていた。2「自己形成要因」:心的、抽象的で文化的アイデンティティとして体験や教わった事を内在化し、性格や態度、気質、好みの形成に関わってきたと思われるもので、具体例は両国とも主観性による多様性が見られた。継承したいものとしては、シンガポールの方が日本の日系国際児より多く挙げられていた。これは、継承したいものが環境要因に頼れないからだと推測された。3「対人要因」:環境要因等、外部にあるものを内面化したり、自己形成要因を外部、他人に表す時に必要な言語、自己表現、態度を含むコミュニケーション関連である。継承したいものとしてシンガポールの日系国際児は日本に比べ自己表現に重きが置かれており、育っている文化の違いが反映していると推測された。

本調査では、通常の間接時より国際児の関心、エピソード、それに伴う感情が豊富に、明確に示され、文化差による課題や親との葛藤等に起因するような心理的援助が必要な際に大きな手がかりとなると考えられる。また、本調査三枚目において「次世代に伝えたいもの」を自ら取捨選択するという段階にてナラティブの変化が見られ、自分の中の「ずれ」と「折り合い」がつけられ、自己理解を促進する場面がある事も示唆される。